



特集テーマを「居場所」に決め、まず、福島の話を知りたいと思った。巻頭論考《View 視野》は、原発事故後の福島の子どもの保育についてずっと調査を続けてこられている関口はつ江先生に書いていただいた。文字通り、子どもをどこで育てるか、子どもが育つ場所、居場所をどこにするのかという、難しく苦しい選択を突きつけられた親や保護者たちがこの国にすること、今も割り切れない思いで暮らし続けていることを忘れてはならない。子どもは通常、親が生活し生業を営む場所の空気を吸って生き始める。自然の匂いや音も、人工物の色や質感さえをも、自らの感性や価値観の素地にしていく。確実に、子どもの最初の居場所に責任を持つのは、大人である。

《視点》で寄稿してくださった三人の先生方は共通して、「居場所」とは、単なる空間ではなく、関係性を意味することを論じている。人は本来、厚みやふくらみなどの体積を持ち、常に脈打ち生成する、ダイナミックで不安定なカラダを生きている。だから、この世界の一隅で確実に一定の場所を占めざるを得ないということが、居場所論のポイントなのではないか。人は、周りの世界をある程度は押しのけないとそこには「居られない」カラダであり、その反作用としての摩擦や振動などの葛藤を、いつもカラダとして感じ続けている。そうした葛藤も含めて、カラダがいい具合に世界の中に納まる場を見いだし、外に向かって新たな関係を結ぼうとする準備態になることが、ウェル・ビーイング（よく居ること）だと言えるだろう。（H）